

令和8年 2月 25日

令和7年度とうきょう すくわくプログラム推進事業 活動報告書

園名	江東区立大島幼稚園
所在地	江東区大島5-38-1

1. 活動のテーマ

<テーマ>

表現活動

<テーマの設定理由>

(テーマに関する子供たちの興味関心、園の特色など)

本園の園児は、外国籍等のこどもたちが半数以上いる。そのため、考えやイメージを言葉で伝え合い共有することに課題がある。そこで、遠足や音楽会などの共通の感動体験を通して、幼児が実際に味わったことをもとに、自分なりの表現を考えたり試したりしていけば、友達の刺激を受けたり、互いのよさに気付いたりしながら、さらに探求していく楽しさが味わえると考え、テーマを設定した。

2. 活動スケジュール

- 1か月に1回程度の、共通の感動体験
- 毎月1～4回程度の表現に関わる活動

3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

- 身体のバランス運動や、様々なイメージにつながる運動遊具を、こどもたちがいつでも取り出して使えるように設定。
- 世界で流行っているミュージック動画を視聴したり、感動体験を写真や動画で振り返ったりできるよう、学級に1台タブレットを配置。
- 楽しかった思いや、見てきたものを思い出したり、イメージを共有したりできるよう、写真を印刷して保育室や廊下に掲示。
- 様々な素材や道具をこどもたちが自分たちのやりたい表現に合わせて選んで使えるよう、保育室に種類別に配置。

4. 探究活動の実績

<活動の内容> (一部紹介)

<4歳児>

- ・春～秋にかけて、近隣の公園や園内の自然物に触れる機会を作ってきた。実際に見たり触れたりする中で、特にチョウの幼虫をよく観察したり、羽化した姿に感動したりする体験をした。
- ・4月から様々な体の動きを経験し、自分なりに考えた動きを試したり、動物や虫等になりきって表現したりする楽しんできた。
- ・12月～2月、これまでの体験や絵本のイメージをもとに、チョウの幼虫を自分たちなりに表現しようと、衣装を様々な素材を使って作ったり、体全身を使って動いているところや羽化してチョウになったところを表現したりした。その姿を保護者の方にも見てもらい、こどもたちが自分たちなりの表現を探究し楽しんで表す姿について、発信した。

<5歳児>

- ・4月から週1～3回程度様々な音楽に触れ、踊る楽しんできた。その中で、自分なりの表現を考えたり、試したりしてきた。
- ・12月、劇団四季のミュージカルを観に行き、音楽に合わせた表現や、様々な舞台装置や衣装に触れて、憧れの気持ちをもったり、再現するためにはどのような方法があるか試行錯誤したりした。
- ・1月、水族館に遠足に行き、水槽にいる様々な水の生き物や、イルカショーを観たりした。その後、自分たちでも水族館を作ろうと、水の生き物やトンネルの水槽を作ったり、自分たちがイルカになってショーを演じたりした。水の生き物やトンネルの水槽では、より本物らしく作ろうと素材や作り方を自分なりに工夫した。イルカショーではイルカの動きや鳴き声まで探求して表現した。

<活動の様子及び、活動中の子供たちの姿・声、子供同士や子供と保育者との関わり>

<4歳児>



こども「あおむしかわいいね。」
こども「昨日よりも大きくなってね。」

こども「いつサナギになるのかな。」
こども「サナギになってからチョウになるんだよ」

こども「サナギになったら動かないんだよ。」

保育者「チョウってどうやって飛ぶのかな？」

こども「羽化した時はじっとしているよ。羽が乾いてから飛ぶんだよ」



<5歳児>



水族館遠足で印象に残っていたトンネルの水槽。再現しようと、こどもたちと、保育者が一緒に考え、試行錯誤した。
こども「巧技台を使うといいかもね」
こども「水はビニールを使えばいいんじゃない」
これまでの経験を生かしながら、どうすれば再現できるか探求した。



様々な材料を使って工夫して作ったクラゲ水槽を年中組が見に来てくれた。

こども「どうやって作っているのかな？」
こども「本当に光っていて、水族館みたい！」

年中組が喜んだり驚いたりする姿を見て、作った年長組のこどもたちも満足そうだった。

5. 振り返り

(振り返りによって得た保育者の気づき)

遠足や音楽会等、共通の感動体験を通して、感じたり、気付いたりしたことが、こどもたちの探求の意欲の刺激となり、主体的な活動につながった。そして、こどもたちが自分たちなりに探求していくためには、保育者がこどもたちの思いや願いに気づき、受け止めたり、一緒に考えたりしながら、実現していくための環境を準備、構成していくことがとても重要であることが分かった。

また、探求をさらに深めていくためには、自分なりに考えることに加えて、友達や周りの人などの考えにも触れることで、さらに自分の考えを膨らませていくことが必要である。今回のすくわくの取り組みでは、こどもたちが同じ感動体験をしていることによって、言葉で伝え合うことが難しくても、イメージや考えを共有しやすく、言葉だけではない自分なりの表現を使った伝え合いの姿が見られた。こどもたちは、自分の考えやイメージが友達に伝わる喜びを味わうことができ、さらなる探求への意欲につながっていた。

以上